



わが日本国は地震に関しては毎日といってよいほど頻繁に発生していて、地震大国などというありがたくない名前までちょうだいしている。最近日本沈没という映画がリメイクされ評判になっているという。

日本沈没は三十三年ほど前、わが国の本格的SF小説の草分けである小松左京氏が書いた大ベストセラーで、当時映画化もされていた。そのころ駆け出しサラリーマンだった私は小松左京氏の大ファンで、原作の小説は当然ながらすぐに読破し、映画も封切り直後に仕事を早退して映画館に駆けつけた思い出がある。

昔今沈没日本



草野 義輔

小学生時代からロケットだの、宇宙ステーションだのといったものが大好きで、図工の時間には好きなものを書いてよいと言われればロケットの絵ばかり描いていた。将来は宇宙飛行士だ、などと夢を描いていたが、

でもあるのでひととき身近に感じていた。報道では宇宙ステーションに滞在するため、現在海中での生活訓練をしているそうだ。

四十年ほど前はロケットだけでもSFになり、月に行けばそれだけで小説になり得たが、二十一世紀になればロケットなど珍しくもなく、月には何度も人類が足跡を残し、まもなく宇宙ステーションも現実となる。

現実はどううまくいくものではなく、簡単に挫折してしまっただ。

殺伐としたニュースが続く今日、子供たちはロケットで宇宙へ、などという単純な夢は持ちにくい時代になったのだろうか、と思う。幼いころの夢を忘れないためにも、リメイクした日本沈没を見逃すわけにはいかない。

その代わりといつては何だが、わが国の宇宙飛行士第2号の若田光一さんは、お母さんが日田の出身で、わが校の卒業生

(日田市昭学学園高校理事長)